
エロ
美咲先生の
水着通勤
～清楚系美人教師が
露出狂に豹変
痴漢電車に揺られて教室へ～
Sample
ねこらった

目次

一　目覚め　紐水着だけを纏った朝
二　出勤　内緒の美貌の解放
三　通勤路　白昼の視姦
四　駅ホーム　盗撮される肢体
五　満員電車、逃げ場はない
六　路上　デッキはランウェイ
七　おまわりさん！　私、興奮してます
八　教壇　もう戻れない

一

目覚め　紐水着だけを纏った朝

初夏向きの薄い掛け布団を押し退けて体を起こすと、美咲が身に着けているのは煽情的なメタリックブルーのマイクロビキニ、それもブラジャーだけだった。

そう気づいても、驚きはなかった。

ただ事実として、頭の片隅に置かれるだけだった。

考えられないことなのに、今の美咲はそれを不自然だと思いすらしなかった。

頭の中は久しぶりに澄んでいる。

数日前……誰だったか……何人かの生徒にスマートフォンの画面――チカチカする妙な模様が回転するだけの奇妙なアプリ――を見せられて以来、頭の片隅に宿った僅かな、使命感とでも言えば良いのか……焦燥感、義務感が消えていた。その使命や義務が何だったのかは、わからない。

ただ、まるで霧が晴れたような、奇妙なまでにすっきりとした目覚めだった。

いつものように壁の時計を見た。六時三十分。今日は一時間目から授業がある。逆算すれば、身支度に使える時間はそう多くない。

シャワーの湯が肩を打つ間も、美咲は昨夜のことを考えなかった。考えようとすらしなかった。それが不思議なことだとは、まだ気づいていなかった。

初ボーナスで買ったお気に入りの高級ドライヤーで長い髪を乾かし、朝食はいつも通りトーストと紅茶。テレビの音量を絞ったニュース番組を眺めながら、パンを噛む。一時間目の英語の授業のプリントを軽くチェックする。何も変わらない、何も変わらないはずの朝。

身支度を終え、灰色のブラウスに、足首まで隠れるロングスカートとカーディガンを合わせる。

ボタンは襟元までしっかり留め、化粧は薄く、髪は団子にまとめ、前髪は目にかからない程度に整える。地味だが清潔で、誰の目にも留まらない――そういう装いを、美咲

は自分の意志で選んできた。綺麗だと思われることが怖かったから。綺麗だと自分で思っていることを、美貌に自惚れていることを誰かに悟られるのはもっと怖かったから。

トートバッグを持ち、玄関脇に立てかけた姿見の横で靴を履こうとして……三和土の隅に、メタリックブルーの布切れが転がっているのに、ふと気づいた。

今朝、目覚めた時に纏っていたマイクロビキニの片割れ。拾い上げる間もなく、姿見に映る自分の全身と、その落とし物とが同時に視界に入る。

瞬間——ガラス片が飛び散るように、頭の奥で記憶が弾けた。

夜の駅前の路上。ネオンの光。素肌に張りつくマイクロビキニ。自分の肌を見つめる酔漢たちの目。

渋滞中の高速道路。それを見下ろす跨道橋。卑猥なダン

スを踊る半裸の自分。目を奪われたドライバーたち。
あの興奮と快感、――そして絶頂。
――昨夜、確かに自分はそうしていた。
鏡の中の美咲と目が合う。
その目は静かに美咲を見下している。失望と、軽蔑と。
（なぁに、その格好……）
「あ……」
声が喉から漏れた。
地味なブラウス。長いスカート。暑苦しいカーディガン。
体を隠すためだけにある、野暮ったい服。それが急に、耐えられないものに感じられた。
抑えられない衝動に駆られ、美咲はその場でブラウスのボタンを引きちぎり、カーディガンと共に脱ぎ捨てた。ロングスカートを乱暴に降ろし、肌着にも下着にも手をかけ、すべてを床に放り出す。ヘアピンを抜き、団子にまとめたばかりの長髪を解く。

全裸のまま早足でリビングへ戻ると、クローゼットの扉を勢いよく開いた。

クローゼットの一番奥の隅。そのボストンバッグは隠すように置いてある。

ファスナーを開けると、中には鮮烈な色彩の服がいくつも丁寧に折りたたまれ、詰まっていた。

穿けば太ももの付け根まで露わになる超ミニスカート、体のラインを残酷なほど拾い上げるボディコンシャスなワンピース、身体の側面を大胆に削ぎ落とした、鼠径部を隠す気すらない極端な超ハイレッグカットの水着、などなど。昨夜、夜の街を練り歩いた時のマイクロビキニもここにしまわれていたものだ。

――どれも、人前では決して着られないものばかり。

誰もいない自室でこれらを身にまとい、自らの豊満な体と端正な美貌を鏡に映してうっとりと眺めることが、未だ恋人を持った事の無い美咲の密かな快楽だった。

鏡に映る肢体を誰にも見せず、夜な夜な一人で楽しむだけの「自惚れ屋で臆病で内緒の私」。

だが、今から、それは内緒ではなくなる。

（そう、今日からは……みんなに、たっぷり見せつけてあげる……私は美人……こんな綺麗な私をずっと隠していたなんて、何て馬鹿だったのかしら……）

熱っぽい視線でボストンバッグの中を探り、美咲は目当てのものを取り出した。

美咲の美貌と肢体に相応しい、今日から自分が身に纏うべきそれ。吐息を漏らしながら、一切の躊躇なく、素肌の上に直接、その艶やかな衣装を身につける。

解いたセミロングの髪に櫛を入れて玄関に向かう。

（……綺麗よ……凄く似合ってる……どうして今まで、しまっていたの……？）

姿見の中の美咲も、今度は満足そうに、うっとりと瞳を細めて頷いた。

床に散らばったままのカーディガンとスカートには、もう目もくれなかった。

二　出勤、内緒の美貌の解放

ガチャ……。

アパートの無機質な鉄扉を開けて二階の外廊下に出てきた美咲は、ほぼ全裸だった。

肩にはいつものトートバッグ。だが、身に着けているのは、紅色の――水着と呼ぶには余りに心許ない、細く平たい「紐」と、十五センチのクリアピンヒールだけだ。

扉に鍵をかけ、美咲は歩き出す。

裸の首元に巻きついた強い光沢のある深紅のチョーカーから、同じ色の平たく細いスパンデックス生地の紐が二本、乳房の上を通り腰へと張りつめている。

カン、とヒールを鳴らして美咲が階段を下り始めると、豊かな乳房が大きく上下に波打った。

紐は所々で絶妙に太さを変え、揺れ動く双丘の頂点――乳首の先端だけを、最小限の面積で覆い隠している。

階段を踏みしめる度に、乳房が揺れる度に、その乳首と腰を結ぶ紅色の線もブルブルと揺れ動き、乳房の動きを強

調した。

紐は、左右の腰の高い位置で前後に分かれ美咲の滑らかな身体を絞り上げていく。後方へ回った一方は、柔らかな肌に食い込み、一歩ごとの肉の蠢きに合わせて深々と尻の谷間へと埋もれ消えている。そして前方に回ったもう一方は、平坦なお腹を斜めに通り、臍の遥か下の下腹部で合流している。

超ハイレッグカットのボトムとなったそれは、美咲が一段、また一段と下りるたび、彼女の最も密やかな部位をキュッと優しく締め付ける。

泳ぐためのスポーツ用品ではない。水遊びするためのビキニとも違う。女性の絶対的な局所だけをピンポイントでなぞり強調するために設計された拘束具のような形状。

乳首に貼り付いた布地はごく薄く、透けることはないものの、その下にある尖った形状がくっきりと浮き出ている。股間を覆う部分は、特有の縫製により中央が秘裂へと深く

深く食い込み、秘めやかな部位のフォルムを隠すことなく露わに浮き立たせている。この水着はそれらを隠すどころか、むしろそこに視線を誘導し、強調する。見る者の劣情を極限まで煽り立てるために作られた衣装だった。

全裸以上に扇情的なその姿で、美咲は朝の光の中を、弾むような肉体の躍動とともに下りていく。

「……ああ」

思わず感嘆の吐息が漏れた。遮るもののない初夏の朝の空気が、全身をダイレクトに撫でていく。朝露を含んだ湿り気と、昇り始めた太陽の微かな熱。衣服という殻を脱ぎ捨てた肌が、外気と直接触れ合うその感触は、恐ろしいほどに官能的で、そして痺れるほどに心地よかった。

階段を下りきった、その時だった。

「あ……」

下の部屋に住む大学生の青年と、鉢合わせになった。彼

は大学のロゴが入ったパーカーにジーンズというラフな格好で、ゴミ袋を手にしていた。

美咲は歩を止めず、彼とすれ違いざま、自然に挨拶した。

「おはようございます」

何食わぬ顔。まるで、いつもの地味な教師の格好で挨拶をしているかのような、穏やかで上品な声音。

青年の動きが、凍りついたように止まった。

彼の視線が、隠しようのない美咲の白い肌、布に喰い込む臀部の曲線、そして露骨に揺れる胸元へと、磁石のように吸い付けられる。ゴミ袋を持つ手が震え、口は金魚のように開閉を繰り返した。

「え、あ、え……み、美咲、さん……？」

信じられないものを見た、いや、見てはいけないものを見てしまったという、極度の狼狽。

その顔を見た瞬間、美咲の顔に、とろけるような笑みが浮かんだ。いつもの「お淑やかな教師」の社交的な笑みで

はない。心の底から湧き上がる愉悦に満ちた、真に美しい魔性の笑みだ。

（そう……もっと見て……もっと慌てて……）

彼の狼狽は、そのまま美咲の、これまで隠し続けてきた圧倒的な美貌への賛辞だった。

美咲は彼を置き去りにして、アパートの敷地の門へと歩き出す。

背中に、彼の熱い視線が突き刺さるのを感じる。今の美咲は白い背中もお尻も太ももも丸出し。両腰から伸びる細い平紐が尻の谷間に潜り込んでいるだけの後ろ姿は、本当に全裸に見えるはずだ。

美咲は門にたどり着くまでの数メートル、まるでランウェイを歩くモデルのように、わざと大きく腰をくねらせた。一歩ごとに臀部を強調し、背後の彼を揶揄うように、そして己の肉体の美を初夏の朝日に見せつけるように、誇らしげに、優雅に歩を進めた。

四

駅ホーム、盗撮される肢体

中
略

群衆の静寂を破り、かすかな電子音が耳に届いた。誰かがスマホのカメラを向け、美咲の姿を隠し撮りしている。断続的に響く数回のシャッター音。

美咲はそのかすかな音にハッと気づいた。

自分の写真がネットに出回り、見知らぬ男たちの手に渡っていく場面が脳裏に浮かぶ。画面越しに、自分の姿を凝視し、欲情する無数の男たち。その歪んだ欲望の標的とされる想像をした瞬間、胸の奥から黒々とした悦びが湧き上がり、全身の肌がカッと熱くなった。

（……どうして私は今まで、男の人にそういう目で見られることを嫌がっていたのかしら？）

今では不思議でならない。あんなに男性の視線を恐れ、遠ざけようとしていたくせに、自室では一人、まさに男たちを惑わせ、欲情させるための淫らな衣装を身に纏い、鏡の前で悦に入っていたのだ。

なんて惨めで滑稽な女。どうかしていた。

美咲は、気づけばカメラのあるだろう方向へ向けて、妖艶なポーズを取っていた。脚をわずかに開いて立ち、しなやかに腰を捻って豊満な胸を前へと押し出す。

背後の視線を意識しながら、細紐が食い込む尻を微かに揺らしてみせる。

一見するとただの立ち振る舞いに見えるさりげない動作。しかし、煽情的な姿勢だった。

誰かが「おおっ……」と感嘆の声を漏らす。

それに引きずられるように、混雑のどこかから冗談交じりの小さな口笛が鳴り響いた。

すると周囲の客たちにも波紋のように緊張のほぐれが伝播し、ホーム全体にどこか浮ついた、ちょっとした「ショー」を鑑賞するような空気が漂い始めた。

美咲はその独特な空気に肌で当てられ、湧き上がる高揚感をさらに加速させていく。

「パシャ」「パシャ」

「パシャ」「パシャ」
小さなシャッター音が増えていく。
美咲の美しい唇が、妖しく、三日月のように歪んだ。
ホームに滑り込んできた電車のドアが開く。
美咲は群衆の視線を全身に浴びたまま、まるでステージに躍り出る主役のような誇らしげな足取りで、車両の中へと一歩を踏み出した。

八　教壇、もう、戻れない

中略

教師の自分が、こんな過激な水着を着て校舎の中を歩いていること――その事実自体が、美咲の神経を異常なまでに激しく興奮させている。

電車の車中でも、朝の路上でも、美咲はこの破廉恥な姿を大勢の人目に晒し、無数の視線のシャワーを浴びてきた。もちろん、それも十分に刺激的で甘美な快感であったことは間違いない。

だが、朝の道を急ぐ通行人たちはみな、どこか遠慮がちにこそこそ、チラチラと見るばかりだった。

痴漢たちですらそうだ。美咲を取り調べた警官たちも努めて美咲の体からは意識を逸らしていた。

美咲は、被視姦の興奮の中にも、どこか物足りなさを残していたのだ。

だが、これから教室のドアを開ければ違う。

逃げ場のない密室で、四十人の生徒たちの目が、嫌が応でも「教師」である自分に釘付けになるのだ。

いきずりの赤の他人からの一瞥ではない、見知った生徒たちからの熱い視線。それを浴びたい。たっぷりと、そう、たっぷりとこの裸身を見せつけたい。

視姦の強制への期待に、自分でも驚くほど胸の先端がむくむくと硬くなっていくのが分かる。

「はぁ、はぁ…」

教壇に立つ自分、至近距離からただひたすらに肌を凝視され続ける一時間弱。それを想像しただけで、美咲の瞳は爛々と怪しい光を放ち、荒くなった息とともに、危うく唇の端から涎がこぼれそうになった。

「あは……あはぁ……っ♡」

階段踊り場の大きな鏡。

そこに映るのは、倒錯した性癖に耽溺し、雌犬のように発情している露出狂の痴女だ。

興奮に目を輝かせ、半開きの口から突き出した舌をチロチロと動かすその顔には、昨日までの「地味でおっとりし

た美人先生」の面影など、微塵も残っていなかった。
階段を登り切った所で、日常を侵食していく昂りが遂に最高潮に達した。股間の奥底から脳天へと、電流のような快感が走る。美咲の視界は真っ白に染まりかけた。無人の廊下で、立ったまま、美咲は両手で股間を強く抑え、全身をピン！と硬直させてのけ反った。
「あぁっ…あっ、ぁっ……！」
立っていられないほど膝が笑う。呼吸のリズムが崩れて過呼吸寸前になった。
全身の血が狂い咲くような興奮に破裂しそうになりながら、彼女は敢えて立ち止まり、息を整える。
一刻も早く教室に飛び込み、呆然とする生徒たちの前に裸体を晒したい。
このピンヒールを今すぐ脱ぎ捨て、狂鳥のような甲高い嬌声を挙げながら裸足で廊下を走り出しそうになる衝動を必死に抑えつける。

続きは本編でお楽しみ下さい。

【あとがき・お知らせ】
お読みいただきありがとうございました。
本編もよろしくお願いします！

美咲先生のエロ水着通勤

～清楚系美人教師が露出狂に豹変
痴漢電車に揺られて教室へ～

発行日：2026/8/16
発行者：ねこらった
連絡先：https://nekora.main.jp/
印刷所：なし